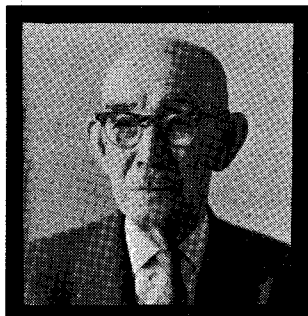


故 名 誉 会 員 中 村 廉 次 氏 を し の ぶ



畏友中村廉次君（あえて君と呼ばせて頂く）の永眠されたのは、昭和42年12月7日午前6時とのことで驚ろいた。半年ほど前、君が腸閉塞で日本大学板橋病院で手術を受けたと聞き病院に見舞ったときは、手術の結果もよく、漸次回復されるであろうとのことで、中野区上鷺沼4-6-22の自宅に帰り、療養に努めておられたので、訃報に接したときは、友人として、また、日本の土木界の大先覚者を失ったことは痛惜に堪えなかった。中村君は明治43年7月東京帝国大学工科大学土木工学科卒業で、卒業生31人中今日まで生残っていたのは、中村君を最年長者として、平井喜久松、本間孝義、三原久君と私の5人であったが、私が中村君をしのぶ筆をとることになったのは、残念であるがまた光栄と思う。

中村君は、富山県射水郡佐野村大字西工藤平蔵2974番地（現在は富山県高岡市）の出身で、明治15年2月22日誕生であるから、満86才の寿を保たれたことになる。君は第四高等学校から東大に入学、明治43年7月土木工学科を卒業されるや恩師東京帝国大学名誉教授広井勇先生の推薦で、北海道庁に奉議され、ただちに小樽築港事務所に勤務された。広井先生が自分で計画し、事務所長として努力された小樽築港に中村君を推したのは、中村君の外に適者なし、と認められたからで、事実中村君が北海道庁における港湾事業に終生を捧ぐるようになったのも、ここに端を発するのである。明治43年から大正4年まで小樽築港事務所です工事の施工に当られたが、大正4年から秋田県技師および同県技師として、秋田県船川築港事務所副長として、もっぱら同港の計画遂行に尽力せられたのであるが、昭和2年には再び北海道庁土木部港湾課長として返り咲き、室蘭築港事務所長を兼務した。

昭和3年から4年にかけて1年間、欧米各国へ出張を命ぜられ、泰西の築港事業を視察研究されたが、帰朝せらるるや室蘭築港のほか浦河、函館の築港事務所長を兼ね、昭和7年には土木部河港課長となり、港湾事業のほか河川工事をも管理統括することとなった。

昭和12年勅任待遇となり本官を免ぜられたが、明治43年北海道庁に就任以来退官に至るまで、道内各重要港湾はもちろん、地方および避難港から漁港に至るまで、築港計画、調査および施工監督の指導に当たられた。

退官後は北海道炭鉄汽船KK技術顧問、室蘭船渠KK取締役、室蘭埋築KK取締役および東亞港湾工業KK取締役として埋立埠頭築造の指導をされた。なかでも富士製鉄KK室蘭製作品工場敷地約100万m²の造成は特筆すべきものである。

そのほか室蘭海岸町岸壁、東北電力KK室蘭本線輪西埠頭および日本製鋼KK大埠頭も同君の指導による。

以上は君が退官後の実績であるが、これら事業実施の基盤となった港湾の現地調査研究とその設計、施工の方法等を細大もろさず収録したものに、昭和36年6月発刊の“北海道港湾変遷史（300頁）”およびこれが補遺とも認むべき“北海道のみなと（250頁）”の二大著書である。両著とも鉄道連絡の変遷、陸海連絡埠頭、漁港、海岸測量など北海道の海に関連するものは全部網羅されており、職を港湾研究実施に奉ずるものにとっては必読すべき名著である。

君が退官前とその後における長年にわたる労苦は遂に官民の認むるところとなり、その功勞を記念すべき運動が起り、昭和37年5月1日には、室蘭市八幡宮前庭に、記念の胸像（写真参照）が建立され、題字は町村北海道知事が誌された。本胸像こそは中村廉次君が北海道ことに室蘭築港に尽された功績を永遠に伝えうるものである。

中村君の趣味は豊富であるが、囲碁と謡曲とは少壮時より稽古せられ、囲碁は級に達し、謡曲は去る昭和32年71才をもって長逝せられた夫人としばしば合唱せられたと聞く。書は比較的晩年に始められたが、優に一家をなし、毎年正月の画仙紙上の始筆上には“以和為貴”を好んで書かれたようである。君の書翰の文章と筆蹟とは範とすべきものが多い。

終りに私事にわたるが、同君は情味く良き家庭を持たれたが、御令室は約10年前の昭和32年に永眠せられ、その後は令息豊氏の御家庭に、静かな日を過されたが、令室永眠7年忌に当る昭和38年3月8日には“中村隆子追憶録”を印刷して、亡夫人生前の労苦をねぎらわれた。これもまた中村君がいかに人情味豊かな紳士であったかが窺われる。私への書信中“お化けでもよいから出て来てくれぬかとさえ思う”と亡夫人を偲ばれた心情には涙なきを得ない。

公私混同の拙文は、君の高傑なる生涯をきずつけるかと案ぜられるが筆を擱くに当り君の靈安らかならんことを祈ります。
（名誉会員 菊池 英彦・記）



以和為貴